

ヴァスバンドゥの『縁起経釈論』について の中間報告

松田和信

種々雑多な唯識文献を取り扱うにあたって、一つの有力な方法は、後代のチベット文献に示される唯識文献の配列、つまり根本典籍としての『瑜伽師地論』とそれに対するアサンガの二つの綱要書『撰大乘論』と『阿毘達磨集論』およびヴァスバンドゥの八論書を基準に置くということである。しかもこの文献の配列がデシカルマ目録 (A. D. 824) の上にも見出し得るということであれば、この基準は若干の重要な文献が欠けているとはいえず、十分に信頼に足るものであるように思われる。ここでヴァスバンドゥの八論書とは、『大乘莊嚴經論』、『中辺分別論』、『五蘊論』、『三十論』、『二十論』、『釈軌論』、『成業論』、『縁起経釈論』を指すが、この中で、現在なおその内容が明らかにされていないものが最後の『縁起経釈論』である。この文献が現在に至るまで未解明のまま放置されてきたのは、まず第一に、チベット語訳およびわずかな梵文断片としてのみ現存すること、そしてそのチベット語訳も極めて難解であることなどが指摘できる。しかもその難解さは、チベット語訳自体に由来するだけでなく、内容的にも、その所説が、ヴァスバンドゥの過去の自著である『俱舍論』と『成業論』および唯識派の根本典籍である『瑜伽師地論』の縁起説を前提にして論述されていること、従ってそれらの典籍を知悉した上でなければ、その論述の展開を辿るのが困難であるといった点に見られる。

ように思われる。しかしこの『縁起経釈論』は、ヴァスバンドゥに帰せられながらも、真偽不明のままチベット大蔵経に収められている他の多くの文献と異なり、その存在は中国側の資料にも伝えられている。『成唯識論述記』は、『三十論』第一偈の *pariṇāma* の解釈について、安慧の説を紹介する中に「彼、世親所造の縁起論中の最後の決択に、無明支は三性に通ずと許すを引く(仏教大系本一巻一三八頁)」と述べるが、これは実際に『縁起経釈論』の最終章の中で、無明は染汚か不染汚かという議論にトレースできるように思われる。ただし、その中の文章を、安慧が『三十論』の釈論に引いているかどうかは定かではない。また義浄も『南海寄帰内法伝』の中で『縁起論』の名を伝え、さらに真諦も『決定藏論』の帰敬偈に『縁起経釈論』の帰敬偈をそのまま転用するなど、『縁起経釈論』の完訳はチベット語訳にのみ存在するとしても、他の真偽不明の文献と同列に取り扱うことはできない。

さて、そのような未解明のまま放置されていた『縁起経釈論』が我々の視野に現われ、そしてこれが今後のヴァスバンドゥ研究に不可欠のものであることが判明したのは、『成業論』の一節に對する次のような注釈者の言葉を通してである。『成業論』はヴァスバンドゥの諸著作の中で、経量部と唯識派との接点に立つ著作とされている。その中で、ヴァスバンドゥは、元來、無心とされてきた減尽定においても、異熟識、つまりアーラヤ識が存在し、そのアーラヤ識があらゆる象染の種子を保持しつつ存続することを「ある経量部の人の説」という形で提示する。注釈者スマティンラは、この説がヴァスバンドゥ自身の見解に外ならないことを示した後で、その経量部を「分別縁起初勝法門経」を考察する人々」と述べる。『分別縁起初勝法門経』は、中国日本の法相宗の

諸文献において、唯識派の主張する十二支縁起の二世一重説の典拠となる経典であるが、実は『縁起経釈論』においても、この経典は十二支縁起の典拠として用いられているのである。ここに『成業論』の注釈者の一つの言葉を通して、『成業論』と『縁起経釈論』をつなぐ一つの糸が見い出されたわけである。

『縁起経釈論』は、『縁起経(雜阿含二九八経)』に対する注釈という体裁を取っているが、内容的には、十二支縁起説に対するヴァスバンドゥの独立の大作とでも言えるもので、年代的には『成業論』の次に書かれたものである。そして今述べたように、十二支縁起の解釈に際して『分別縁起初勝法門経』をその典拠とする。この経典の縁起説は、種子説に基づく二世一重説であり、ヴァスバンドゥはそれを有部の『発智論』の三世兩重説を否定した上で用いる。つまりヴァスバンドゥは、『分別縁起初勝法門経』を援用しつつ『縁起経』を解釈しているのであるが、それが『成業論』の注釈者によって書き留められたのであると思われる。

私は以上の事実に気づいて以来、『縁起経釈論』をグナマティの復釈とともに解説中であるが、現時点までに読み終った部分で判断すると、この文献はアーラヤ識説を導入し、唯識派の二世一重説をもって十二支縁起を解釈するものの、その論述の仕方はあらゆる点にわたって経量部的であると言える。そのような点で、『縁起経釈論』は『成業論』と同様、ヴァスバンドゥの思想的変遷を解明する一つの鍵となる文献であり、唯識派のアーラヤ識説の成立を追求する場合にも、一つの傍証となる記述を含んでいるように思われる。今後ともこの『縁起経釈論』の解説を継続し、

最終的には全体の和訳を発表した上で、その思想内容について解明したいと考えているが、とりあえず、この文献について今までに発表したものを提示し、簡単に内容を紹介しておきたい。

[略号] *PSVy* = *Pratīyasamutpāda-nyākyā* (縁起経釈論)
AVVS = *Ādi-śiṣya-ābhāga-sūtra* (分別縁起初勝法門経)

(1) 「分別縁起初勝法門経——経量部世親の縁起説——」(『仏教学セミナー』36号、一九八二)スマティシラの記事に基づき、*AVVS* が経量部の影響下にあるヴァスバンドゥの所依の経典であることを指摘。併せて *AVVS* に基づく *PSVy* の所説を紹介。

(2) 「世親『縁起経釈』におけるアーラヤ識の定義」(『印度学仏教学研究』三十一—一九八二) *PSVy* 識支の解釈の章の紹介、そのアーラヤ識説が成業論の文章に完全に一致することを指摘。

(3) 「*Vasubandhu* 研究ノート(1)」(印度学仏教学研究)三十二—一九八三) *PSVy* におけるヴァスバンドゥの自著に対する言及、および兄アサンガの説を紹介し、ヴァスバンドゥの著作順序とアサンガとの関係を追う。

(4) 「*Abhidharmasamuccaya* における十二支縁起の解釈」(真宗総合研究所紀要)創刊号、一九八三) *AVVS*、*PSVy* の縁起説研究についての私の問題意識を記した上で、その一資料として *Abhidharmasamuccaya* の十二支縁起説を和訳。

(昭和五九年一月三十一日)